

参詣曼茶羅の読図に向けて

岩鼻通明

一 はじめに

今春、大阪市立博物館において開催された特別展で数十点の社寺参詣曼茶羅が一堂に会した姿は壮観であった。では、どのようなジャンルを社寺参詣曼茶羅と称しているのだろうか。難波田徹氏は、これを「礼拝を目的として制作され、風俗画的、説話画的な要素を多分にもりこんだ曼茶羅図を総称する概念」と規定されている（注¹）。

ここで留意すべきは「社寺参詣曼茶羅」ということはこれらの作成された中世末当時から使われていたものではなく、昭和43年に開かれた京都国立博物館の「古絵図」特別展に際して、先述のような概念規定にもとづいて発案された学術用語であるという点である（注²）。

参詣曼茶羅の研究自体もこの特別展を契機に活性化していくのであるが、その展開については以下で述べたい。

二 参詣曼茶羅へのアプローチ

古絵図に関する研究はどうしても実物を眼前にして熟覧した上でなければ立論しがたいという側面が存在する。その点から「社寺参詣曼茶羅図」という一群の古絵図が初めてまとまった形で展観された京都国立博物館の特別展は、まさに研究史上の出发点であった。この特別展の展示に関わられた故景山春樹・武田恒夫・難波田徹の三氏がリーダーとなつて参詣曼茶羅研究が進展していくのである（注³）。

その参詣曼茶羅研究が、近年さまざまな分野からアプローチが行われるようになり、多様化する傾向をみせている。ここでは、その流れを国文学・歴史学・地理学という三つに整理して概観してみよう。

まず、国文学の分野においては絵解き研究の一環として参詣曼茶羅研究が進められている。林雅彦氏の立山曼茶羅研究はこの

分野における先駆的業績である（注⁴）。また、近年、徳田和夫氏は、多賀社、清水寺等の各地の参詣曼茶羅にみる縁起・靈験譚の読解を続けられている（注⁵）。

ただ、国文学からのアプローチは、縁起や伝承をテキストとして参詣曼茶羅を読解するという形をとるため、どうしても文章と絵との対応関係の考察に終始しがちであり、黒田日出男氏も指摘するように（注⁶）、絵そのものの分析は不十分といわざるをえない。

また、口承文芸という絵解きの性格上、時代を経るにつれて刻々と絵解きの内容が変化していくことは当然であり、したがって、テキストと絵図との同時代性の考証が不可欠となってくるし、さらに、参詣曼茶羅の制作主体（依頼者）、絵師、絵解き法師、絵解きの享受者の四者の相互関係も従来は十分論じられることがなかったが、今後はこれらの関係を整理しながら参詣曼茶羅研究を展開していくことが必要となる。

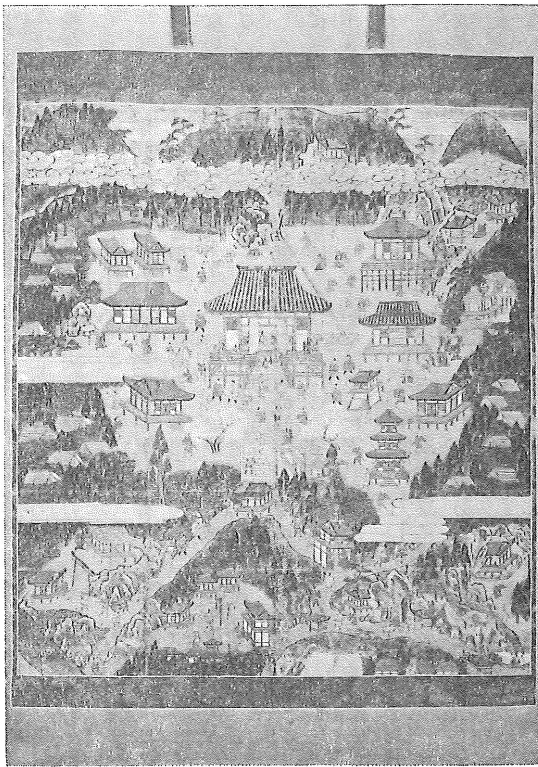
ところで、参詣曼茶羅の画面の中に文字注記や貼り紙が存在する場合がしばしばみられる。これらは読解に際して有力な手が

かりとなるが、逆に注意すべき点も多い。

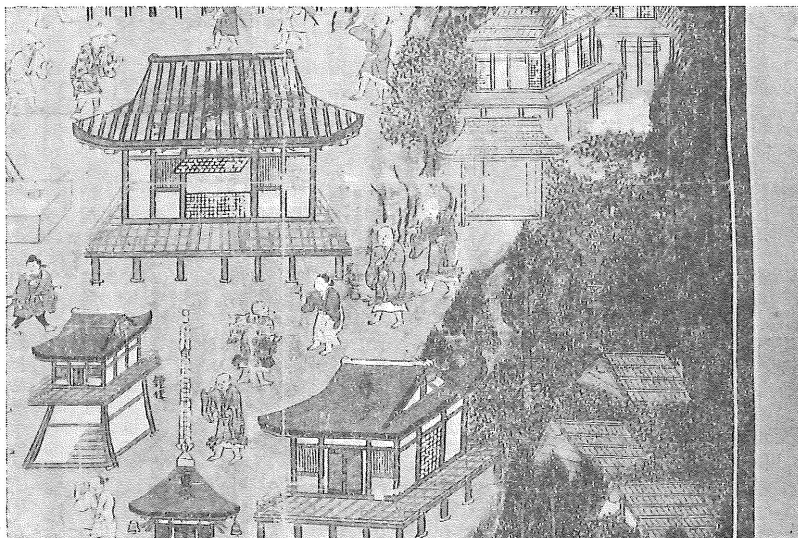
まず、文字注記が繁雑にみられる参詣曼茶羅は制作年代の下るものが多いようである。このことは絵解きの衰退を示唆する現象ではないかと考えられる。要するに、口伝では絵解きが継承できなくなり、やむなく画中に文字を記したものと想定される。

一方、文字注記や貼り紙が参詣曼茶羅の制作当時ではなく、後世に追筆されたという可能性も存在する。この場合は特に、当初の制作者の意図が追加された文字注記や貼り紙にどれだけ反映しているかは疑問である。

具体例をあげれば、徳田和夫氏は中山寺参詣曼茶羅に登場する美丈丸説話について論じておられるが(注7)、二人の美丈丸のうち、文字注記がなされているのは一方のみである(写真一、二)。文字注記のない童子が果たして美丈丸であるか否か、あるいは文字注記自体が追筆ではなかるうか、といった疑問が生じてこよう。かくのごとく、



写真一 中山寺参詣曼茶羅



写真二 中山寺参詣曼茶羅にみる美丈丸

縁起・伝承と参詣曼茶羅との対応関係にしても一筋縄ではいかない面がみられるが、参詣曼茶羅と対をなす縁起や伝承は数多く存在するため、今後の展開が注目されよう。ただし、筆者の理解においては、参詣曼茶羅に描かれた縁起・靈験譚はあくまでも付随的なものとどまつている。

次に、歴史学からのアプローチについて触れてみたい。当初、参詣曼茶羅研究は美術史的視点から出発したが、近年、黒田日出男氏を中心に展開されている絵画史料論という枠組の中でも、絵巻物や荘園絵図とともに参詣曼茶羅が論じられるようになってきた。

黒田日出男氏は那智参詣曼茶羅の分析を手はじめとして(注8)、最近、清水寺参詣曼茶羅についても徳田説への反論を提起され(注9)、個別の参詣曼茶羅研究の蓄積を意図されておられる。

それにつけても、今春の大阪市立博物館の「社寺参詣曼茶羅」特別展で、多くの研究者が実見して参詣曼茶羅研究はにわかに弾みがついたようであり、この特別展が研究史上の大きな一里塚となったことは確か

である。

さて、黒田日出男氏的那智参詣曼荼羅の分析に対し、西山克氏は以下のような反論を展開された。すなわち「黒田論文は、参詣曼荼羅を通図的に分析する視点、あるいは図像や図法が含意する特定の意味や価値を、客観的に分析する視点を持っていない。そのために、黒田論文は独善的で説得力を欠く「読み」の陥穽に陥っている。」(注10)という指摘をされている。

しかし、個別絵図分析と通図的分析は、いわば車の両輪であり、相互に補ないながら参詣曼荼羅の多様な世界が解明されていくものと考えたい。ともかく、黒田日出男氏も触れられているごとく(注11)、絵画史料論はまだ緒に付いたばかりであり、今後の方向性を定める上でも論争が繰り返されることによって堅固な枠組が構築されていくことを期待したい。

最後に、筆者の属する地理学からのアプローチについて述べたい。地理学においては、伝統的に古地図研究が古くから進められており、一定の成果を蓄積している(注12)。従来は、日本図・世界図といった小縮尺地

図の研究が主体となっていたが、近年は荘園絵図等の大縮尺地図の研究も盛んに行われるようになりつつある(注13)。

ここで振り返れば、地理学にとっては、昭和43年の京都国立博物館の特別展で、社寺参詣曼荼羅が「古絵図」の中に含められて展示されたことは大きな意義があった。すなわち参詣曼荼羅を大縮尺地図としてとらえる分析の枠組が基礎づけられたのである。

参詣曼荼羅は西山克氏の指摘のごとく「聖域のある種の案内図」的側面を濃厚に有しており(注14)、そこに表現された「聖なる空間」に対して地理学的アプローチが可能となる。ただし、参詣曼荼羅にみられる空間表現はユークリッド空間の範疇を超えたものであり、トポロジー(位相空間)の観点から把握することが要求される(注15)。筆者は前稿でこの立場から西国霊場の参詣曼荼羅について通図的検討を試みたが(注16)、それについては後で述べたい。

三 参詣曼荼羅のルーツ

参詣曼荼羅の大部分は中世から近世への過渡期の産物であるといえるが、その成立に関しては諸説が混沌としている現状である。中世の宮曼荼羅をルーツとする説(注17)、あるいは縁起絵をルーツとする説(注18)、さらにはそれらとは別個に「聖域のある種の案内図」として成立したとする説(注19)が提唱されている。

ここで、ひとまず参詣曼荼羅を地域別、年代別に整理分類することを試みて、それからルーツについての議論に加わりたい。参詣曼荼羅に描かれた社寺を地域別に整理すれば(表一)、畿内を中心として西は兵庫県、北は北陸三県、東は日光を例外とすれば静岡県にまで分布している。この分布は東国から西国巡礼に参詣する場合の行動空間と一致する。したがって、参詣曼荼羅の成立は西国巡礼の発展と密接な関係があるものと想定される。

ちなみに、縁起絵は四国・九州の社寺に多く伝来しており、両者の分布の地域差からしても、縁起絵が参詣曼荼羅の成立に直接的な影響を与えたとは考えにくい。

表一
参詣曼荼羅に描かれた社寺
(太字は複数の所在を示す)

府県名	社寺名
和歌山	那智・紀伊三井寺・粉河寺・日光社・高野山
大阪	葛井寺・施福寺・灌安寺
京都	清水寺・善峰寺・北野社・法観寺・法輪寺・珍皇寺・祇園社大政所・成相寺・松尾寺
兵庫	中山寺・須磨寺・道脇寺・明要寺・千光寺
奈良	吉野山
滋賀	長命寺・多賀社
三重	伊勢神宮
愛知	東観音寺・熱田社・新清田社・甚目寺
石川	白山・石動山
富山	立山
長野	善光寺
静岡	富士山
栃木	日光山

一方、宮曼荼羅をはじめとする垂迹曼荼羅との関連については、筆者は西国巡礼の第一番札所である青岸渡寺の聖域を描いた那智参詣曼荼羅を重要視したい。有名な那智滝図を代表として、中世の垂迹曼荼羅の遺品が多く熊野三山には伝来しており(注20)、その伝統の上に那智参詣曼荼羅が成立したことは疑いない。

藤沢隆子氏の指摘のように(注21)、那智参詣曼荼羅は他の参詣曼荼羅にも影響を及ぼしている。筆者はさらに、那智参詣曼荼羅と対になって伝来することの多い観心十界図が他の参詣曼荼羅に影響している可能性に言及しておきたい。それは観心十界図の「人生の階段」の部分で、童子や若者が手に梅や桜の花、あるいは柳の枝を持っている表現である。これらの表現は他の参詣曼荼羅の境内のそこかしこに切り貼りされたがごとき描写として浮かびあがってくる。

この問題は参詣曼荼羅の作成年代論とも関わってくる。今、参詣曼荼羅の作成年代を大雑把に三期に区分すると、室町後期成立の前期の作例として、富士参詣曼荼羅(浅間大社本)や松尾寺参詣曼荼羅をあげるこ

とができる。これらに共通する特徴は人物図像が小さく、没个性的に表現されている点である。

次いで、近世初期成立の中期の作例として、那智参詣曼荼羅を中心とする一連の作例があげられる。これらは前述のように西国巡礼との関係が深いものと想定される。また、この時期の人物と景物の表現は近世初期風俗画に共通するものがみられる。

そして、江戸中期以降に成立をみる後期の作例として、立山曼荼羅や白山曼荼羅の一群が存在する。これらを参詣曼荼羅に包括するかどうかは議論の別れるところであろう。前・中期の参詣曼荼羅は穀屋聖の勧進活動の一環として成立をみたが(注22)、これら後期の参詣曼荼羅の多くは山岳信仰に関わる御師の布教活動の中で作られている(注23)。このように作成主体は若干異なるが、

従来から吉野曼荼羅は参詣曼荼羅に含められてきた経緯もあるため、立山・白山曼荼羅も同等に後期の作例として分類したい。

さらに、近世には参詣曼荼羅に類似した絵図がしばしば作成されている。先日も、上越市高田の本覚坊という真宗寺院に吉崎

御坊絵図とともに所蔵されている吉崎御坊参詣曼荼羅ともいべき絵図を実見してきただけりである。私見では、これらの絵図も包括して、参詣曼荼羅という概念をなるべく広く適用していく方が、絵画史料論の立場からも実り多いものになると思われる。以上、参詣曼荼羅のルーツに関して検討を試みたが、筆者としては前期の作例で人物図像にさほど重点が置かれていないこと等から垂迹曼荼羅からの影響はある程度存在したものと考えたい。「聖域のある種の案内図」としての傾向が鮮明になるのは中期以降ではなからうか。

四 参詣曼荼羅のモチーフとディテール

参詣曼荼羅はいつたい何を主題として描かれたものであるうか。実は、この問題には簡単に結論を出しがたい面がある。それだけ参詣曼荼羅の図中には多様な世界が繰り広げられているのであり、だからこそ前述のような諸分野からのアプローチが可能であるといえよう。それゆえ、当面は多様なアプローチが行われ、議論百出の時期が続くであろうし、その蓄積が新たな地平を

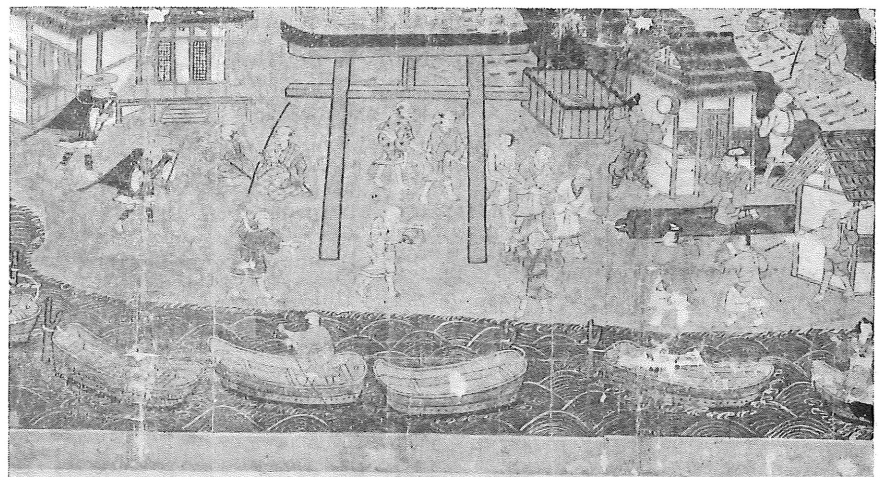
図一 長命寺参詣曼荼羅トレース図（注16）の拙稿より引用



開拓することになるう。

さて、参詣曼荼羅をトポロジーの観点から把握すれば、洛中洛外図と同様にさまざまな場面が雲烟によってつなぎ合わせられて全体像を構成しているということになる。したがって、個々の図像というディテールの検討を積み重ねていくことによって参詣

写真三 長命寺参詣曼荼羅にみる「御木曳」



曼荼羅の全体像に迫るというのもひとつの分析手法たりうる。

ただ、本稿では紙数の関係もあり、興味深いディテールの一、二を紹介して参詣曼荼羅の多様な世界の一端を垣間見るにとどめたい。

まず、長命寺参詣曼荼羅の一場面の紹介から始めよう。この図の下端中央、琵琶湖の湖畔に立つ大鳥居の右手に「御木曳」の情景が描かれている(図一、写真三)。この「御木曳」の描写は那智参詣曼荼羅の右上部にも存在するため、前述のように那智参詣曼荼羅からの影響と解釈することも可能である。

ところが、二例が伝来する長命寺参詣曼荼羅のうち、長命寺本では那智参詣曼荼羅と同様、「御木曳」の曳き手は男であるのに対し、もう一方のフグラー氏本では曳き手がなんと女性となつて描かれているのである。

同じ長命寺を描いた参詣曼荼羅において、全く対照的なディテールが存在することをどう解釈すればよいのであろうか。雌雄一対の参詣曼荼羅であつたのか。筆者も確たる解釈を示しえないが、参詣曼荼羅の多様性の一例として提示した次第である。

次に、北野社参詣曼荼羅の一場面をとりあげたい。この北野社参詣曼荼羅は初期の作例とされてきたが、洛中洛外図との比較によれば、塔や回廊の存在から慶長十二年

(一六〇七)の豊臣秀頼による大改築以降の景観を表現した可能性もありうる。

それはともかく、本図の下部に「馬の左、西宮殿毘沙門では、女子が祠の下にもぐり込んでおり、当時の参拝方式なのであろうか。」(注24)と指摘された表現がみられる。

これに関し、故高取正男氏は出雲大社の素がのやしろ驚社の床下に参籠する事例を紹介して、「寺社の堂舎や社殿の後戸、あるいはその床下は、多く特別の靈験の期待された場所とみてよい。」と述べておられ、この北野社の床下参籠は「古風な祭儀習俗や宗教意識」(注25)の絵画表現として貴重な事例といえよう。

五 古地図としての参詣曼荼羅

最後に、参詣曼荼羅を地理学的立場から把握しようとする筆者の試論を提示して結びにかえたい。

近現代の測量に基づく地図を完成品とみる地図学上の従来の解釈からは、荘園絵図のような中世絵図は歪みの多い不正確な地図として過小評価されるのが常であつた。その立場からすれば参詣曼荼羅などは古地

図に含まれるかどうかも疑問であろう。

しかし、参詣曼荼羅には地図としての情報が豊宮に盛り込まれており、トポロジに立脚して、その空間表現を把握することによつて参詣曼荼羅の読図が可能となる。

そもそも、中世絵図の空間表現は等縮尺な表現ではなく、身体の延長としての自らの生活世界を重点的に描くという特徴が存在する。したがつて、画面の中心と周縁では縮尺を異にし、自らの生活空間である中心部は拡大して描写され、周縁部は逆に圧縮表現される。それによつて生じる歪を雲烟がおおい隠しているのである。

たとえば、伊勢参詣曼荼羅においては左上方に富士山が描かれ、数百キロの距離が圧縮表現されている。

一方、参詣曼荼羅の中心部に描かれるのは現世的宗教景観であり、縁起や靈験譚に関わる図像は周縁部へ押しやられている。このことから、参詣曼荼羅は霊場の案内図的性格が濃厚であり、現世的宗教景観の表現がテーマであつたといえよう。いわば、近世の名所図会類の先がけとなる絵図であつた。

もとより、参詣曼荼羅の世界には中世の諸原理が包摂されている。たとえば、中世の身分制も構図の中心 周縁関係に反映しており、貴人や高僧は中心部の本堂付近に描かれ、高野聖、あるいは水汲みや柴木をかつぐ人々は周縁部に配置せられている。貴賤を問わず登場する多くの参詣者は参詣曼荼羅特有の表現であり、彼らの空間的配置を通絵図的に検討していけば、大きな成果が得られると予想される。

以上、参詣曼荼羅研究の展望が中心となったが、今後は諸学が協調しながら論を展開することを期待して稿を結びたい。

〔付記〕本論の骨子は、伝承文学研究会昭和62年度大会（於・山形市）において発表したものである。なお、写真の掲載をお許しいただいた長命寺・中山寺に感謝いたします。

注

- (注1) 難波田徹「社寺参詣曼荼羅図について」『芸能史研究』27、昭44)
- (注2) 『古絵図』特別展覧会図録、京都国立博物館、昭44。
- (注3) 景山春樹『神道美術』雄山閣、昭48。武田恒夫『近世初期障屏画の研究』吉川弘文館、昭58。難波田徹編『古絵図』日本の美術72、至文堂、昭47。
- (注4) 林雅彦『立山曼荼羅』諸本攷の試み、『国語国文論集』7、昭53)
- (注5) 徳田和夫「絵解きと物語享受」『文学』54 12、昭61)
- (注6) 黒田日出男「絵画に焦点をあてた読解を」『絵解き研究』5、昭62)
- (注7) 徳田和夫「中世の目、中世の耳」『国文学』32 7、昭62)
- (注8) 黒田日出男「熊野那智参詣曼荼羅を読む」『思想』七四〇、昭61)
- (注9) 黒田日出男「参詣曼荼羅と文芸」『国文学解釈と鑑賞』52 9、昭62)
- (注10) 西山克「社寺参詣曼荼羅についての覚書」『藤井寺市史紀要』8、昭62)
- (注11) 黒田日出男「絵画史料とその読み方」『史海』34、昭62)
- (注12) 織田武雄『地図の歴史』講談社、昭48。室賀信夫『古地図抄』東海大学出版会、昭58。矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房、昭59。
- (注13) 葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』上、地人書房、昭62。
- (注14) 西山克「社寺参詣曼荼羅についての覚書」『藤井寺市史紀要』7、昭61)
- (注15) 水津一朗「文化景観のコード」『空間・景観・イメージ』地人書房、昭58)
- (注16) 拙稿「西国霊場の参詣曼荼羅にみる空間表現」『人文地理学の視圖』大明堂、昭61)
- (注17) 中村興二「社寺参詣曼荼羅の成立と展開」『本地仏の総合的研究』科研費報告書、昭58)
- (注18) 藤沢隆子「参詣曼荼羅の成立」『近

畿地方を中心とする霊場寺院の総合的研究』元興寺文化財研究所、昭60)

(注19) 前掲注14参照。

(注20) 鈴木昭英「金峰・熊野の霊山曼荼羅」(五来重編『修験道の美術・芸能・文学』)『名著出版、昭56』

(注21) 藤沢陵子「西国三十三所巡礼寺院における参詣曼荼羅図の成立と那智参詣曼荼羅図」(『元興寺文化財研究』24、昭61)

(注22) 前掲注14参照。

(注23) 拙稿「参詣曼荼羅にみる立山修験の空間認識」(『歴史地理学紀要』27、昭60)

(注24) 福原敏男編『社寺参詣曼荼羅』展覽会目録、大阪市立博物館、昭62。

(注25) 高取正男『民間信仰史の研究』法蔵館、昭57。